

2013.5.31

現代俳句千葉

109号

新会長挨拶

前を向いて

会長 大畑 等



三月十七日の当協会の総会で会長に選任されました。よろしくお願い致します。

現代俳句協会と当協会の歴史は「現代俳句千葉99号」(30周年記念特別号)に掲載されていますので、ここでは割愛したいと思います。

例えば、私もまたいくつかの縁でもって現代俳句協会に所属しているのですが、さて現代俳句協会とは何なのか、と問わずにいまし

た。たぶん居心地が良かったのでしよう。さて問いを立てたときの答えは、金子名誉会長の言葉が的確かと思えます。『現代俳句年鑑』一九八九年版(現代俳句協会刊)で次のように語っています。

「当初創設した石田波郷さんや西東三鬼さんたちが、戦後一番新しい組織内容をもった、われわれの理想とする俳句協会を作ろうじやないか、そして作った。だから現代の俳句協会と言ったんです。したがって、現代俳句の協会ではありません。」

「私の中では、現代俳句という概念ははつきりしています。それは、現在ただ今を中心とした俳句だと思います。そして古き良きものを

従属的な型、活用体として置くということですが。

今日にも真つ直ぐ通じる見解と私は思います。金子名誉会長の言葉——現代俳句の協会ではない、現代の俳句協会である——は現代俳句協会を俳句の多様性と新しさを生む土壌とみなすことでもありましよう。

振り返れば、山中葛子前会長の三年間はこの土壌をゆたかにすることにあったと思われまます。従来の津田沼研究句会に加えて二つの研究句会——青葉研究句会と柏研究句会——が生まれました。春・秋の吟行会に加えてミニ吟行会が生まれました。千葉県は東西にも南北にも長いがために地区協としての活動が偏ってしまいました。これは設立当初からの課題でありました。二つの研究句会とミニ吟行会は小さな一歩ではあります。未来への一歩と思えます。また会報「現代俳句千葉」では、会員の近況や「私の感銘句」という欄を設けました。「私の感銘句」では、会員は作品を発表するだけではない、どう読まれているかも知ることが出来ます。会員相互の交流を密にしようとの企画で毎号盛況な欄となっています。

昭和五十五年の千葉県現代俳句協会設立以来、多くの会員に支えられて今日の当協会があります。今後ますますよろしくお願い致します。

目次

前を向いて	大畑 等	1
定期総会		2~3
俳句大会		4~5
織本花嬌と一茶	山中葛子	6
諸家近詠		7~8
私の感銘句		9~11
春の吟行会		12~13
津田沼研究句会、青葉研究句会報告		14
柏研究句会報告・図書紹介・ひろば		15
会員・会友の近況		16
掲示板		16

千葉県現代俳句協会会報

平成二十五年年度

定期総会・俳句大会開催される

平成二十五年三月十七日(日)千葉市文化センターにおいて、平成二十五年年度の総会・俳句大会が開催された。総会では会員参加者九一名、委任状二二八名で定足数を満たした。議長には小野功氏を選出。来賓に神奈川県森田緑郎名誉会長、東京多摩地区三浦土火副会長、東京都港区栗原節子副幹事長の三名の方々をお迎えした。

■総会

総会では次の議案について審議し、いずれも可決した。

- 【第一号議案】平成二十四年度事業報告(資料一)
- 【第二号議案】平成二十四年度会計報告(資料二)
- 【第三号議案】監査報告(資料三)
- 【第四号議案】平成二十五年事業計画(案)(資料四)
- 【第五号議案】平成二十五年予算(案)(資料五)
- 【第六号議案】役員改選(資料六)

【資料一】平成二十四年度事業報告
一、行事

- (1)定期総会および俳句大会
- ① 平成二十四年度総会 三月十八日(日) 千葉市文化センター 出席者 八二名
 - ② 同右 俳句大会 参加者 九四名
 - ③ 同右 懇親会 三井ガーデンホテル千葉 参加者 四九名
- (2)吟行会
- ① 春の吟行会 四月二十九日(祝) 成田市滑河周辺 参加者 五八名

② 秋の吟行会 十月十日(祝) 千葉港遊覧 参加者 六七名

(3)研究会

① 津田沼研究会

毎月第二火曜日 午後六時より 津田沼一丁目町会会館

② 青葉研究会

毎月第四木曜日 午後一時三十分より 千葉市民会館

③ 柏研究会

毎月第二土曜日 午後一時より 柏市「ハックルベリー」

(4)ミニ吟行会 六月三十日(日) 館山湾(北条海岸) 参加者 二九名

二、幹事会

(1)定例幹事会

① 平成二十四年一月二十四日(火) 船橋市勤労市民センター

② 五月二十二日(火) 同右

③ 八月二十八日(火) 同右

三、会報の発行

一〇四号(二月二十九日刊)

一〇五号(五月三十一日刊)

一〇六号(八月三十一日刊)

一〇七号(十二月一日刊)

四、会員数等 平成二十四年十二月三十一日現在 会員 四二一名・会友 三五名 計 四五六名

【資料二】平成24年度会計報告書(平成24年1月1日~同12月31日)

次年度繰越金(円)	収入の部(円)		支出の部(円)	
	費目	実績額	費目	実績額
収入合計 3,097,219	前年度繰越金	804,544	会議費	64,387
支出合計 1,952,843	諸事業収入	1,354,629	会報発行費	470,084
次年度繰越金 1,144,376	助成金収入	847,000	通信費	29,660
	会友費収入	82,000	行事費	1,106,671
	雑収入	9,046	印刷費	117,565
	合計	3,097,219	消耗品費	41,746
			交通費	48,000
			交際費	58,171
			雑費	16,559
			予備費	0
			合計	1,952,843

財産目録(円)

千葉銀行(川間支店)	普通預金	1,060,568
	現金	83,808
	合計	1,144,376

主な異動

- ① 新会員十五名 新会友十名 退会二九名
- ② 物故者(会員) 藤本秀峰、正岡柏葉、中島玄一郎、吉田季生、古滝達男、芹澤美香子(会友) 岩淵清、大野多美子

【資料三】 監査報告

平成二十四年度の会計および事業の執行状況について監査した結果、すべて証票書類と一致しており、正当に処理されていることを確認しました。

平成二十五年一月二十九日

監査役 吉野 精
同 長浜 聰子

【資料四】 平成二十五年事業計画(案)
一、行事

(1) 定期総会および俳句大会

- ① 平成二十五年年度総会 三月十七日(日) 千葉市文化センター
- ② 同右 俳句大会 同右
- ③ 同右 懇親会 三井ガーデンホテル千葉

(2) 吟行会

- ① 春の吟行会 四月二十九日(月・祝) 浦安周辺
- ② 秋の吟行会 十月二十日(日) 吟行地未定

(3) 研究会

- ① 津田沼研究会 毎月第二火曜日 午後六時より 津田沼一丁目町会会館 二句事前投句方式
- ② 青葉研究会 毎月第四木曜日 午後一時三十分より 千葉市民会館 三句事前投句方式
- ③ 柏研究会 毎月第二土曜日 午後一時より 柏市「ハックルベリー」五句当日投句方式
- (4) 各地の句会(ミニ吟行会等)の実施

二、幹事会

(1) 定例幹事会

- ① 一月二十九日(火) 船橋市勤労市民センター

三、会報の発行

- ① 一〇八号(三月刊)
- ② 一〇九号(五月刊)
- ③ 一一〇号(八月刊)
- ④ 一一一号(十二月刊)

(2) 臨時幹事会

- ① 四月二日(火) 船橋市勤労市民センター

- ② 五月二十一日(火) 船橋市勤労市民センター
- ③ 八月二十七日(火) 同右
- ④ 十一月二十六日(火) 未定

【資料六】

千葉県現代俳句協会平成二十五年役員
会長 大畑等／副会長 秋尾敏・渡辺澄・並木邑人・檜垣梧樓／幹事長 秋尾敏(兼)／副幹事長 内田庵茂・並木邑人(兼)／

事務局長 高木一恵／事務局次長 高橋宗史
／会計幹事 野口京子／広報幹事 松澤龍一
／幹事 上野紫泉・大塚弘毅・小高稔・木之下みゆき・久野康子・小林俊子・小林実・小張直子・清水伶・下村洋子・白木暢子・高橋健文・林阿愚林・星野一恵・細野一敏・森村文子・三須民恵・矢野忠男・山崎幸子／監査役 吉野精・長浜聰子／顧問 伊藤希眸・大木雪浪・小出治重・塩野谷仁・高桑婦美子・武田和郎・益田清・三苫知夫・実籾繁・山崎聰・山中葛子・横須賀洋子／参与 青木一夫・岡田淑子・興津恭子・菊地京子・希田沙知子・斎藤すず子・直江裕子・中村棹舟・藤田守啓・門谷杜人・吉田耕史・渡辺礼子

【資料五】 平成25年度予算(案)
(平成25年1月1日~同12月31日)

収入の部(円)

費目	予算額	前年度予算額	備考
前年度繰越金	1,144,376	804,544	吟行会等
諸事業収入	1,200,000	1,400,000	
助成金収入	800,000	800,000	
会友費収入	60,000	60,000	
雑収入	10,000	10,000	
合計	3,214,376	3,074,544	

支出の部(円)

費目	予算額	前年度予算額	備考	
会議費	90,000	120,000	吟行会等	
会報発行費	480,000	450,000		
通信費	50,000	72,000		
行事費	1,200,000	1,400,000		
印刷費	200,000	150,000		
消耗品費	50,000	30,000		
交通費	80,000	80,000		
交際費	70,000	60,000		
会報合本準備費	60,000	0		
雑費	20,000	30,000		
予備費	914,376	682,544		
合計	3,214,376	3,074,544		

平成二十五年度 俳句大会

総会を終え、午後からは山中葛子前会長の退任記念講演、続いて俳句大会が行われた。参加者一〇一名。司会は内田前事務局長と高木事務局長、披露は星野、高橋、清水の三名。大会終了後の懇親会には来賓三名を含め六五名が参加、司会は松澤広報部長。俳句大会の成績は左記の通り。

【事前投句の部】

● 千葉県知事賞

なにから話そう立春の指ぎつね 菊地 京子

● 千葉県現代俳句協会賞

一匹になりたいことがある金魚 小野 裕文

● 千葉市長賞

歩いても歩いてても十二月八日 藤原 公子

● 毎日新聞社賞

上向きの蛇口の疲れ八月来 加藤 法子

【席題の部】 席題「風船」「犬ふぐり」

〈入賞者作品〉

(二句の合計点による。掲載句は二句のうち一句)

● 千葉県現代俳句協会賞

貌の無い風船だけが漂えり 戸邊 光一

● 千葉県教育長賞

風船爆弾死語というには暗すぎる 吉田 耕史

● 千葉日報社賞

突っ張ってゐる風船の持ち時間 相原 一枝

(これより上位入賞者の作品)

単線のような人生風船飛ぶ 菊地 京子

犬ふぐり川原は風の泣くところ
風船やひとり泣けばみんな泣く
犬ふぐり一茶の涙かもしれぬ
口ぐせよ大器晩成犬ふぐり

風船百個音符になつてゐる園児
野心などないから風船すぐ跳べる
犬ふぐり空の愁いを受け止めて
円空の両手に余る犬ふぐり

蒼天は風船疲れておりぬ
風船のような老後を許してね
紙風船広げてたむ古代文字
犬ふぐり揺れては零す星の私語

いぬふぐり男の涙咲いてゐる
風船をとばしてみたら父と母
うたた寝のやうな安らぎ犬ふぐり
昨日とおく転がっている紙風船

いぬふぐり上総に多き石仏
風船を飛ばし静脈黄昏れる
頬杖は日暮れの慣い犬ふぐり
紙風船をつく老境を突く

はらからの遠くなりたる紙風船
犬ふぐり船は太陽系を出て
風船の空たつぷりとある時間
風船の色いろいろ卒園す

犬ふぐり後ろの正面蒙古斑
風船に入りたくって子が駆ける
風船の空に遊びし死者の足
犬ふぐり願望とばす犬ふぐり

犬ふぐり円空坐仏くすぐらる
風船の空に遊びし死者の足
犬ふぐり願望とばす犬ふぐり
犬ふぐり願望とばす犬ふぐり

犬ふぐり願望とばす犬ふぐり
犬ふぐり願望とばす犬ふぐり
犬ふぐり願望とばす犬ふぐり
犬ふぐり願望とばす犬ふぐり

人生の舞台裏から犬ふぐり
風船も恋も彼方に消えてゆく
復興へ一歩ふみだす犬ふぐり
紙風船つけばあわあわ日暮れけり

愚痴詰めて赤い風船野に放つ
雑草と言わせないから犬ふぐり
犬ふぐり振替パスはまた来ぬか
風船や見えない粒子の渦の中

風船をついて屈託なきころ
団結かたき一人臥す家犬ふぐり
どの道も避難経路に犬ふぐり
紙ふうせん胸の海溝渡りたる

いぬふぐりピエロの涙すくいとる
晩年や踏まれて清き犬ふぐり
強風に抗ふ風船福島忌
赤い風船黄色い風は危険です

一句浮かび一句忘るる犬ふぐり
孫に足す息もふわふわ紙風船
罪深き空へ空へと犬ふぐり
躓きうぬのおくやま犬ふぐり

風船に風糸という自由不自由
轍から一寸に咲く犬ふぐり
風船となりて学び舎卒業す
風船の行けるだけ翔び星捕りに

青空のクレーンの下犬ふぐり
原子炉の形に風船起き上がる
風船よ綺麗な日本の空を飛べ
下総の犬のふぐりは沢山咲く

不器用なおとがい多し犬ふぐり
犬ふぐりたまにはでっかい夢を見る
三好美穂子
吉野 精

星野 一恵
森村 文子
斉藤すず子
渡辺 澄

林 阿愚林
野口 京子
馬淵 津枝
高橋富久江

秋尾 敏
下村 洋子
白木 暢子
高木 一恵

大塚 弘毅
高桑婦美子
高橋 健文
福田志津子

小出 治重
保坂ミエ子
矢野 忠男
小高 稔

東 國人
伊藤 希眸
高橋 宗史
並木 邑人

佐藤 信顕
檜垣 梧樓
小野 功
松澤 龍一

小池美佐子
五十嵐みよ
大畑 等

道端にしゃがむ駄々っ児犬ふぐり
 策尽きて風船飛ばす夜の道化
 気になって気になって風船の消えた村
 荊棘線に囲まれてゐる犬ふぐり
 犬ふぐり青き光彩休耕田
 ここからは鋸南の聖域犬ふぐり
 逃げる風船追いかけてほしいから
 大空にみるみる風船召されけり
 風船や願いを託し大空へ
 人が人を宿す愛しさ犬ふぐり
 風船のくすねやすきとなりけり
 風船の終の住処は水平線
 スクラムを組み日溜り犬ふぐり
 犬ふぐり暮らしの変化ふたつほど
 ラファエロは天女の瞳赤い風船
 いぬふぐり溢れて胸に遠い空
 風船がどんどん逃げて青い海
 紙風船追ひて幼な児行つたきり
 目に見えぬ汚染深まる犬ふぐり
 一億の黙祷ゴム風船空に
 履きなれた靴がいざなう犬ふぐり
 ふっせん消ゆ骨密度はかつたから
 チバは今日みんなならか犬ふぐり
 まっ先に野を光らせる犬ふぐり
 犬ふぐりパッチリまなこあけなさい
 ・
 何もない空に風船物語
 風船飛んで黙っている少年
 犬ふぐりホットドックが良く売れる
 青い風船山河洗われ洗われて
 風船を束ねて何処へ飛ぶつもり

内田 庵茂
 森田 緑郎
 小林 実
 楠見 恵子
 高橋由紀子
 三浦 土火
 山口 明
 清野 敦史
 高橋 博
 横須賀洋子
 白井 春こ
 浅見美代子
 池田 幸
 小野 裕文
 金子 未完
 伊藤 典子
 佐々木幸子
 井上けい子
 重田 忠雄
 椎名 鳳人
 袴田 菊子
 荒井 玲
 なかもと淑子
 保坂 末子
 大村 錦子
 岩崎 令子
 小川トシ子
 青木 一夫
 市川 唯子
 藤田 富江



戸邊光一さん



総会議長の小野 功さん



懇親会



菊地京子さん

犬ふぐり春の容ちになる千葉城
 首すくむ人等生き生き犬ふぐり
 残留の放射能あり犬ふぐり
 背中の児も風船握り黙祷す
 二年経し爪痕にあり犬ふぐり
 ・
 犬ふぐりはるか明日香の空の色
 紙風船ひとりごろの傾ぎとも
 (作品の上の・印は来賓、正副会長、幹事長、顧問特選)

長井 寛
 竹内 絵視
 イザベル真史
 栃木 きよ
 興津 恭子
 佐藤 晏行
 田口満代子

● **作品募集**
 第五十回 現代俳句全国大会

● **応募規定** 三句一組・二〇〇〇円
 何組でも可。ただし、新作未発表作品に限る。

前書き不可。所定用紙使用。〒、住所、
 姓号、電話番号、協会員・会員外の別
 を明記。

投句料は定額小為替（無記名で）又は
 現金書留に限る。（必ず作品同封の事）

● **送付先** 〒一〇一〇〇二一
 東京都千代田区外神田六一五―四
 階楽ビル七階

● **第五十回現代俳句全国大会係**
 電話 〇三―三三九―八一九〇
 締切 平成二十五年七月三十一日 必着



記念講演



山中前会長へ花束贈呈

退任記念講演録

織本花嬌と一茶

前千葉県現代俳句協会会長 山中 葛子



本日は、千葉県の傑出した女流俳人の一人、江戸時代の織本花嬌について、そして花嬌を永遠の女性と憧れた小林一茶についてお話をしてみたいと思います。

大場俊助の『一茶の研究』（平成五年島津書房刊）によれば、花嬌は一茶が四〇歳を過ぎてから慕情を燃やした人であり、彼女の死後も懇切に供養を営んで冥福を祈るなど、足繁く富津に通っています。

花嬌は名を園といい、旧西川村（現富津市）で学者などを輩出した小柴家の庄左衛門の娘として生れます。長じて、旧富津村でこれも代々名主を務める織本家の嘉右衛門に嫁ぎます。嘉右衛門は砂明と号する俳人でもありました。二人の間には娘曾和が生まれ、子盛の俳号を持つ名主の次男を婿養子に迎えます。

花嬌の俳句の師は、江戸の第三世雪中庵大島蓼太で、花嬌の号は師から授かったとされています。花嬌の俳句も、蓼太のものの静かな平淡な作風を受け継いでいるところです。

夫砂明は四十六歳で亡くなり、花嬌は四十四歳前後で未亡人となります。そこで家業を子

盛、曾和夫婦に任せて隠居し、別邸「対潮庵」に移って時折句会を開くなどしていました。一方、一茶は江戸で転機を迎えていました。俳人としての生計が難しくなり、その際援助の手を差し伸べたのが房総の俳人たちです。「一茶園」を創り、毎月江戸に添削料を添えて俳句を送ったのです。花嬌も同様であり、一茶はこれらを添削・選句した「一茶園月並」を刊行しています。

享和三年、一茶四十一歳のとき富津に四泊し、次の句を詠んでいます。

美しき団つちば持ちけり未亡人

文化元年、四十二歳のとき富津に二十三泊

我が星は上総の空をうろつくか

花嬌はその名のとおり美しく艶めかしくも身が堅く、一茶はプラトニックラブを温めていました。大場俊助は「今まで誰も気付かなかったが『享和手帖』は愛の諷諭であるということだ」と力説しています。

文化二年、三年にも富津を訪れます。

目出度さは上総の蚊にも食はれけり

このとき初めて「花嬌来ル」と、日記に花嬌の名が記されます。また、一茶が富津に行けない年には「金百疋」が富津より届いてい

ます。匿名ですが無論花嬌だったでしょう。

文化六年、一茶四十七歳のとき富津に九泊し、花嬌の対潮庵にて歌仙を巻きます。これが花嬌の最後の句会でした。そして翌文化七年四月三日、花嬌は突如として病没します。富津大乘寺で百ヶ日の際の句。

あさかほ
葬の花もきのふのきのふかな

一周忌、三回忌にも墓前に句を手向け、文化九年には『花嬌家集並追善集』を編んで、三回忌の翌月五月三日に墓前に捧げます。『追善集』から。

春風や女力の鍬に迄

用のない髪と思へど暑さかな

名月や乳房くわへて指さして

一茶は五十二歳のとき妻きくを迎えるも、九月には花嬌の墓に詣で、また五十五歳のときにも、最後の墓参りとして大乘寺に入ります。六十四歳で三度目の結婚をし、六十五歳で世を去りますが、生涯花嬌の俳句を胸に抱き続けたのです。

花嬌と一茶の関係もここで終わりますが、私の中では新しい問題が提起されました。それは佐藤雀仙人の『下総と一茶』に「一茶の恋人説には賛成できない」とあったからです。私は大乘寺とその周辺を何度か訪ねていますが、新たなテーマを抱きつつ、これからも房総の俳句の旅を楽しんでいきたいと思っています。

（並木邑人記）

諸家近歌

還暦の娘と酌む新酒子守唄
影富士を本年最後の冬落輝
数え歳八十八の雑煮碗
息災が願いの全て初詣
白梅や誕生月の計り事

伊東 靖子

ふる里の市制十年鳴高音
電線を越えて木枯音かはる
年用意生きるものみな影つれて
後ろ手に仰ぐ神木冬うらら
青竹の匂ひしみつく松飾り

秋葉 紅陽

石崎多寿子

黄落期われきらきらと失語せり
冬空はフェルメールの青喪が明ける
貝が口開かず十二月八日なる
雪霏々とこの空はいま死者のもの
早春の窓一つ足す設計図

石井 浩美

安保を知らずおでん屋の赤提灯
春隣文房具屋のためし書
春の雪FMラジオよりノイズ
初蝶やコップに残る水半分
春シヨール映画の闇に来てほどく

大畑 等

我が腸夜行列車の匂いせり
歩いてくる首より上は杜若
無花果の肉を付けたる肖像画
鳴高音赤面したる父と居り
十日ほどは干物も売りて雪女郎

足元の雲かぎりなく初菫
結界門潜れば冬麗枯淡なり
春の雪野兎の足踏ぬくみあり
猪独活に早や霜枯の兆かな
曲りおる黒松ネズコの根張り雪女郎

林 昭雄

正月のしつぽが残る露地に入る
慣れという心地おぼろの落し穴
たんぽぽにいわれてしまふ物忘れ
万葉集読みあぐ速度春の川
連獅子の現われそうな茅花風

石井紀美子

新井 秋芳

碁敵の初手天元も松の内
風光る囲碁の妙手のひそみいし
碁の形崩れとまらぬ大暑かな
碁敵の打つ手に気品文化の日
久びさに碁敵マスクして来たる

井上けい子

眠られぬ夜や河鹿の闇深し
梅雨滂沱心の闇を流れゆく
散骨は賢治の汽車で銀漢へ
秋蟬に森の所在を知らざる
荒星やがらんだうなる地震の浜

岩崎 令子

蔵の扉を開けて少年花の冷え
紅葉かつ散る神域の水溜り
相間のかそけきあそび野紺菊
秋桜さよならぐらいいたたまえ
入道雲大きな丸を書くように

浅間仰ぎ稲穂の香る中に立つ
マリヤ観音おもいて折れる女郎花
高原に白き風吹く芒原
終りなき妻の仕事や石路の花
冠雪の富士透き通るベイブリッジ

飯田 静子

白鳥とあと幾年を逢えば死ぬ
寒月の銀輪青年の尖り
臘梅に触れて光となる畏れ
妹の手紙抱き締む黄砂の日
短編小説早春の荊棘から

市川 唯子

大木 雪浪

鮮やかに劇中劇の鬼あざみ
埴輪みち花からすうり夜に妖し
稲雀いづこ足なき一軒家
鴉群れ枯木のふりをする枯木
手足みな来歴違ふ冬至風呂

東 國人

冬銀河机の上の不等式
転んだら起きてこない子暮早し
雪ん子雪ん子溶け出す前に働けや
あめふらし小論文頻出テーマ解説集
危機管理マニュアルはどこ黄金虫

遠藤 寛子

蜜柑箱減りのはやさもまたうれし
暖気する競走馬たち冬桜
枯れ菊の道漬け物を買に行く
山茶花の飾りほどこす乳母車
枯れ蓮の「こわい。」と子らの走り来る

諸家近歌

イザベル真央

競争の嫌いな子ども花キャベツ
小春日や大人のピアノ発表会
女子会のひとり八十初写真
雪解けの庭に隠し仔やってくる
うちの梅となりの小梅子の育つ

飯島 昭子

白桃や身にある傷のやはらかき
月光に触れて祇王の苔の花
詰め込みし夢はじかれて木の葉髪
抽斗に遠き海峡雪降り
冬瓜のつるりと溶けて少年老ゆ

及川 洋平

缶切りのいらぬ缶詰夢喜二の忌
遅しき面魂の目刺し焼く
春寒や漬け菜の石の傾く夜
仏壇の灰固まりて寒明ける
エスカレーター駆け登る人春寒し

金澤 恵子

大寒や赤児のように母くるむ
母と居て幸せのある寒椿
二ヶ月の嬰を預かり春を抱く
猛暑日や触れし豊乳母生きる
二の腕に母の温もり金木屋

小野 功

もぐら里どの家からも花ぐもり
生粋の下町ことば蟬しぐれ
夜店から父の売り声こども会
十六夜の男階段踏み外す
指先の今も覚える手毬唄

香取 白文

地虫出ず意気地の無さを見られたり
いくたびも田見廻りして春田かな
山笑う裾の川鮎食えぬまま
利根下流輪中に芽吹く屋敷森
地震跡の川面慰む柳の芽

岡崎 翠

紋入りの花嫁のれん鶴帰る
歯みがき粉はねて一輪梅一梅
百姓の長子に生まれさくらんぼ
町中の空うごかして鯉のぼり
雪晴や一音下げる調律師

加藤 法子

紙風船をつく老境を突く
嘴を揃えてうぐいす餅が並ぶ
桃・李どちらも咲いてかたづけ
ひらきたる文箱の隅に紋白蝶
息づまるほどなだれくる夜の桜

金子 未完

悪い児はいないおしくらまんじゅう
初雪や一人ぼつちは恥ずかしい
亡き人を何と語るか白木蓮
希望をいつばい書く春のノート
蛙飛び芭蕉に弾んで一茶に

小野富美子

白鳥を見て来て甘く煮る牛乳
盗墨の錯綜する腕風光る
のつべりと過ぎる一日大根煮る
生一本分けて花見の紙コップ
裾子にて長男ちりめんじゃこ甘し

岡田 春人

親猫の尻尾とあそぶ子猫かな
握手して力をもらふ薄暑かな
街並のととのつてゆく花木木
父のほか海鞘の嫌ひな家族かな
耐へるには保護色といふ冬仕度

加納ひでこ

碧天のダイヤモンドダスト黙祷の日
オラばかり生きてて・漁夫墓洗う
北陸の魂祭りグググ魚穫りたし
江差追分の余韻ほんものの雪空
西洋蒲公英さらり外科医師の呪文

興津 恭子

春暁のLEDが放つ翳
忘却の遠いところに蕩からむ
秋思いま雨水の跡の測定値
述懐の会話しとしい冬桜
荒涼と火星ロケット冬ざるる

岡田 信子

蛤や長寿の国のこんくらべ
さようなら原発バレード春疾風
梨の花避妊の猫の鈴通る
バラ園に光の子らと青い鳥
リラ冷やチルチルミチル目覚めたり

金子 敏

焼野より抜け来し人の声太き
風騒ぐまで花栗と知らざりき
鳥渡りきつてみずうみ日の器
白息を絡ませ合つてのち別る
うすごおり渡つてみたき月がある

私の感銘句

イザベル真史

作者名 号頁

夢狩と言いて折りたる水柱かな	塩野谷 仁	104 2
人類に声出すあわれ梅真白	塩野谷 仁	104 2
長電話夫が秋刀魚を裏返し	清水 重陽	104 2
夕桜でのひらは血を隠しつつ	曾根 毅	104 2
マスクして目に見えぬもの怖かりし	高橋由紀子	104 3
春寒の身より一まい羽根の飛ぶ	杉山真佐子	104 3
ふらふら漕いで暖流へ乗り移る	木之下みゆき	104 4
手をつなぐババは青い目七五三	樋口 博徳	106 4
原罪や骨うつくしき桜鯛	門谷 杜人	107 5
桜の美いつも寝返りくりかえす	山崎 文子	107 6
人類に声出すあわれ梅真白	塩野谷 仁	

「あわれ」の言葉の深さがこの句に拡がりを与えている。
人類以外の声を出さないもの、声を出せないものの存在を想像させてくれる。
梅の香がする。この梅は真白である。「あわれ」の様々な感動が梅の香を配置することにより格調高く清心な一句となつてゐる。

吉田 耕史

風呂敷のマントで空を翔べたころ	鈴木 一行	104 2
海神の心臓のよう黒海鼠	庄司とほる	104 2
ユーラシア衿巻の端 サフラン恵須取	竹内 絵視	104 3
拾つたら椿が泪ためていた	直江 裕子	105 8
次の世はブータンの妃にぞ冬の蝶	島 淑子	105 9
手を伸ばす春の雲より繩梯子	袴田 菊子	105 9
パンドラの空き箱浮かぶ春の海	白木 暢子	105 9
啼くほどに郭公過疎を欺けり	保坂 末子	106 2
冬バラの真赤に燃えて意地通す	中村 棹舟	106 4

天上に集まる鯨ヨロコ・オノ 藤田 守啓 107 4
ユーラシア衿巻の端 サフラン恵須取 竹内 絵視

こうした句は難解といつて避けてはならない。わずかな手掛りをもとに鑑賞してみる。ユーラシアはアジアとヨーロッパである。そのユーラシアこそ衿巻のようだというのだ。その衿巻の端にあるサフラン(昔日本領だった樺太)に作者の想い出があるか肉親がかつて居住していたのか。さらに恵須取はシベリアと樺太の間にある間宮海峡をのぞむ街で林業や紙等が盛んであり日ソ国境の近くにあつた。深い望郷句。

田口満代子

海岸に花束二つ大南風	藤井 稜雨	106 2
水平線も君も潔癖花菜畑	森 美樹	106 3
春眠をぶら下げてゐる吊輪かな	西澤 繁子	106 3
アルミ箔しゃらんと切つて 霰	羽村美和子	106 4
宴果て厚着のマハが八、九人	並木 邑人	106 4
崩れそう泣きそう笑いそうな雪	三須 民恵	107 4
原罪や骨うつくしき桜鯛	門谷 杜人	107 5
一頭の凍蝶として永平寺	門谷 杜人	107 5
熱帯夜鏡に海の深さかな	渡辺 澄	107 5
はつとふたりどきつと茸飯の夜	山中 葛子	107 6
一頭の凍蝶として永平寺	門谷 杜人	

おおぶりの蝶は、まだほの温かい。華麗な翅を広げたまま眠つてゐるようだ。山門は雪真白。荒行の声もとどかぬ永平寺川流域。詠むもの理想像がひろがる、美しい一句。

高橋富久江

風呂敷のマントで空を翔べたころ	鈴木 一行	104 2
味噌汁のような人いて冬構え	鈴 カノン	104 2
瓦礫されど万の営み燕来る	高木 一恵	104 2

肉体を影が支えて冬日射し 高桑婦美子 104 3
検査着の堅き寒さを身にまとう 鈴木 和子 104 4
拾つたら椿が泪ためていた 直江 裕子 105 8
寒波くる都会を魚の顔をして 長浜 聰子 105 8
河北新報菜飯炊き上がる匂ひ 中里 結 106 4
自由席へどうぞ余生の花筵 保坂ミエ子 107 5
蛇好きもいる世の中は面白い 吉田 耕史 107 5
河北新報菜飯炊き上がる匂ひ 中里 結

河北新報社の二年以上に渉る遷延性意識障害者への取材記事集「植物状態を越えて『生きてゐる』」は多くの報道機関をおさえ第31回フアイザー医学記事大賞を受賞。

声を出して訴えられない弱者の代弁もしてくれる地道な機関名が俳句に登場したことに驚かされた。だが素林で優しい菜飯の湯気と慈味、ほっこりと春の香が溢れる色彩は同社を讃えるに相応しく、二者をとり合わせた力量に感服しました。

菊地 京子

かえりうたとは水鳥の一羽なる	塩野谷 仁	104 2
たぶん死は冬のさくらのようにくる	直江 裕子	105 8
春愁を測り切れない鯨尺	中村 冬美	106 4
クロッカス光の束を転送す	村上千代美	107 4
月光を拾えばほのと毀れけり	森村 文子	107 4
花時計灼けて港が見える丘	八木 邦夫	107 5
馬となること忘れて瓜売らる	松下總一郎	107 5
遠野よりとおいところが青胡桃	門谷 杜人	107 5
雨おんな顔からころび青母郷	山中 葛子	107 6
本当の空ひかり合ふ秋あかね	山崎 幸子	107 6
田中しのえ		
七日粥五十年添いし妻の味	新井 秋芳	106 2
万両の実のきつぱりと陽を返す	富澤さち子	106 2

若葉光やつぱり素顔のままがいい
 二人居て無言の中の根深汁
 崩れそう泣きそう笑いそうな雪
 クロッカス光の束を転送す
 踏んばっていてあめんぼの軽さかな
 自由席へどうぞ余生の花筵
 さまざまな影置き帰る大枯野
 風鈴の南部の民話聞くここに

渡邊 廣子

味噌汁のような人いて冬構え
 崩るるを天に齒ぎり霜柱
 一木ずつ黙祷終えしごと芽吹く
 片栗の花咲く幽かなる羽音
 立ち上がるわらびぜんまい生国も
 春夕焼ビル染め空に紅絹を張り
 ホームラン入道雲の口が開く
 春愁を測り切れない鯨尺
 ドロップ罐音なき底の余寒かな
 飢餓海峽原発ノーと海月のデモ
 春夕焼ビル染め空に紅絹を張り
 春の夕焼は他の季節と異なり、柔らかさ、優
 しさが感じられる。
 現代の街並には角張ったビルディングが空に
 突き刺さるように林立し、正面に受ける入り日
 もそれぞれ空に反射し、それなりに美しいと
 思うが、空に張られた紅絹との対比が面白い。
 しかし、空に張られた紅絹は、間違いなく春の
 風景である。

大塚 弘毅

長電話夫が秋刀魚を裏返し
 転生の風に吹かるる大賀蓮

触れないで怒りでいつばい風仙花
 蝸蝸鳴くや十年後の半減期
 墓標めく一本松に初日さす
 おしやべりは不得意科目かき氷
 春愁を測り切れない鯨尺
 人類に死角ぼろぼろ去年今年
 急がねば母の年来る蓬原
 藪椿本音言うたび傷ついて

転生の風に吹かるる大賀蓮

前世は何であつたのだろうか。大古のロマン
 が今眼前で美しく咲いている。きつと姫君の生
 れ変わりかも知れない。自然の中で喜ぶようにの
 びのびと薄紅色の花弁をひろげている。作者は
 大古の時代を偲びながら、空想に浸って、この
 美しい大賀蓮に見とれている。

馬淵 津枝

草笛をすろどく君が遠すぎて
 草の実や采けるな転ぶな言われても
 犬ふぐりどんでん返し物語
 寒波くる都会を魚の顔をして
 冷奴なかな丸くなれなくて
 草笛の一音風を踏み外し
 静かなる鬨志夏木として立てり
 枝豆が弾ける青き人生論
 かなかなが耳のうしろで淋しがる
 蛇好きもいる世の中は面白い
 草笛の一音風を踏み外し
 風を踏み外すの表現に自然的効果を上げて、
 音と風の微妙なずれが郷愁を誘う。季語を生か
 す姿勢が身についていることがよくわかるそう
 いう作品であると思います。

縞帯を巻く鼻になりたくて
 灯の届くかぎりが大池蕪汁
 水甕に密かに春月棲まわせる
 てのひらの浅瀬こより雛流す
 寒夜行ベテルギウスはまだ遠い
 たぶん死は冬のさくらのようにくる
 届かぬ距離に三月の時刻表
 静かなる鬨志夏木として立てり
 春眠をぶら下げている吊輪かな
 一頭の凍蝶として永平寺
 一頭の凍蝶として永平寺
 酷寒の永平寺の様子を映像で観たことがある。
 凍て付いた廊下を、修行僧が素足で歩るいて行
 く。その足の白さが沁みた。深閑として、凜と
 して、まさに冬の永平寺は、一頭の凍蝶に他な
 らない。

黒澤 雅代

人類に声出すあわれ梅真白
 透明な善意だつたか薄氷
 ふわりふわりたしかに元日を歩く
 肉体を影が支えて冬日射し
 愛憎は遙か時雨れて野辺送り
 冷奴なかな丸くなれなくて
 源流はこの青梅雨の奥の奥
 十三夜最上階のポタン押す
 新緑へ男は余暇を埋めに行く
 永遠の列から零れ雲雀笛
 透明な善意だつたか薄氷
 薄氷とは春先にごく薄く張る水。その名のご

長浜 聰子

縞帯を巻く鼻になりたくて
 灯の届くかぎりが大池蕪汁
 水甕に密かに春月棲まわせる
 てのひらの浅瀬こより雛流す
 寒夜行ベテルギウスはまだ遠い
 たぶん死は冬のさくらのようにくる
 届かぬ距離に三月の時刻表
 静かなる鬨志夏木として立てり
 春眠をぶら下げている吊輪かな
 一頭の凍蝶として永平寺
 一頭の凍蝶として永平寺
 酷寒の永平寺の様子を映像で観たことがある。
 凍て付いた廊下を、修行僧が素足で歩るいて行
 く。その足の白さが沁みた。深閑として、凜と
 して、まさに冬の永平寺は、一頭の凍蝶に他な
 らない。

星野 一恵 106 2
 福田志津子 106 3
 三須 民恵 107 4
 村上千代美 107 4
 廣谷 幸子 107 4
 保坂ミエ子 107 5
 保坂ミエ子 107 5
 宮川登美子 107 5
 鈴木カノン 104 2
 清水三千代 104 2
 杉山真佐子 104 3
 多田ユリ子 104 4
 田部井知子 105 8
 中澤 澄子 105 8
 福島由紀恵 106 2
 中村 冬美 106 4
 広瀬 梯子 107 4
 三好ひろし 107 4
 中澤 澄子 107 4
 清水 重陽 104 2
 千葉 智司 105 8

半田 千枝 105 9
 白木 暢子 105 9
 松本 静頭 106 2
 藤井 遥 106 3
 中村 冬美 106 4
 みちのくたろう 107 4
 藤田 富江 107 4
 保坂ミエ子 107 5
 千葉 智司 107 5
 芝崎 梓 104 2
 高橋富久江 104 3
 西澤 照雄 105 8
 長浜 聰子 105 8
 細野 一敏 106 2
 保坂 末子 106 2
 星野 一恵 106 2
 森 孝子 106 3
 保坂ミエ子 107 5
 吉田 耕史 107 5
 保坂 末子 107 5

清水 伶 104 2
 塩野谷 仁 104 2
 下村 洋子 104 3
 田口満代子 104 3
 瀬尾 教子 104 4
 直江 裕子 105 8
 徳吉 洋 105 9
 星野 一恵 106 2
 西澤 繁子 106 3
 門谷 杜人 107 5
 門谷 杜人 107 5
 塩野谷 仁 104 2
 芝崎 梓 104 2
 高桑 弘夫 104 3
 高桑 弘夫 104 3
 高桑 弘夫 104 3
 木之下みゆき 104 4
 細野 一敏 106 2
 細根 栗 106 3
 森 孝子 106 3
 野口 京子 106 4
 並木 邑人 106 4
 芝崎 梓 106 4

とく、薄くてすぐ壊れるが、あえかゆえの美しい早春の季語である。
過去に於いて薄氷を踏むような場面を経験した。しかし時を経て思い返すと、あれは私の為にした純粹な善意からだったのか……と冷静に考えたりする。
作者の心象のにじむ佳句と感銘した。

田村 麗

灯の届かきりが大地蕪汁 塩野谷 仁 104 2
 チャコ線に添わず待針星月夜 高橋富久江 104 3
 白梅や敗れて己れ取り戻す 戸邊 光一 105 8
 大花野くたびれし足雲に乗せ 西河しん平 105 9
 ここに町ありしと言ふや溝浚へ 藤井 稜雨 106 2
 仏心も鬼心も大事雲の峰 増田 斗志 106 3
 朝顔の濃紺という心意気 番場 松香 106 4
 クロッカス光の束を転送す 村上千代美 107 4
 冬の月人形町を通るとき 山崎 聰 107 6
 悪妻に時効などなしけむり茸 山中 葛子 107 6
 悪妻に時効などなしけむり茸 山中 葛子 107 6
 先ず悪妻とけむり茸の句材の取り合わせの妙に感心、悪女は困るけど悪妻の裏は良妻です。時々悪妻になるのは、掴み所の無いけむりの様な存在で魅力的で可愛いのではないのでしょうか？御句楽しく読ませて戴き有り難う御座居ました。

金澤 恵子

夏峰を仰ぐその果て日本海 桃井美千代 107 4
 この国の大動脈を鳥渡る 村上千代美 107 4
 願いごと多くて汗のお賽銭 藤田 守啓 107 4
 原発ノ一へ二〇万人銀河炎ゆ 三好ひろし 107 4
 幼子を諭す幼児合歓の花 八木 邦夫 107 5
 母ジャム煮て家中をパンにする 保坂ミエ子 107 5

かなかなが耳のうしろで淋しがる 保坂ミエ子 107 5
 張りあげて鳴くみんなの孤独かな 松岡 節子 107 5
 はつとふたりどきつと昔飯の夜 山中 葛子 107 6
 百日紅きのうと同じ雨の音 山村 則子 107 6
 かなかなが耳のうしろで淋しがる 保坂ミエ子
 毎年夏になると何種類かの蝉の声を耳にする。気ぜわしく鳴く蝉やジージーと耳ざわりに鳴く蝉、ミンミンと声高々に鳴く油ゼミ、クマ蝉の声も混じる。雄は高い声で鳴き立てるとか。作者の詠まれたひびくは、夕暮れ時に細くすきとおる声で鳴く、もうすぐ暗くなり、眠る時間、人が恋しい……淋しく鳴く。みみの後で淋しがるの表現が素敵で共感し、好きな句です。

井上きよ美

立春やまだ空つぼのランドセル 高橋由紀子 104 3
 馬の脚演じて汗の村芝居 高桑婦美子 104 3
 父と子に武器となる黙菲雑炊 高野 礼子 104 4
 それからは思ひ出ばかり秋の潮 谷本 元子 105 8
 おしやべりは不得意科目かき氷 藤井 遥 106 3
 影さきに動き出したるあめんぼう 森 章 106 3
 手をつなくパパは青い目七五三 樋口 博徳 106 4
 天折の数ほどあかい蛇いちご 門谷 杜人 107 5
 寒红梅胸にあたため妻癒えよ 八重樫弘志 107 5
 コスモスの風に道問う旅の駅 渡邊 廣子 107 6
 手をつなくパパは青い目七五三 樋口 博徳
 何と微笑ましい光景であろうか。結婚し、子を得て七五三を迎える慶びは親として当然の事。そして、子供は緊張の中に誇らしさをも感じているのだろう。その儀式に臨んだ父親が青い目であったという驚き。国際結婚は珍しくなくなっている昨今、日本の文化を受け入れているパパに喝采を送りたい。

新会員紹介

市原市青葉台 内田 正成(会員)
 (推薦者 山中 葛子)
 九十九里空もお店も鯛かな
 名水や悴める手で戴きぬ
 ごうごうと三保の松原春一番
 四街道市つくし座 越野 雄治(会員)
 (推薦者 長峰 竹芳)
 黙禱は何も祈らず沈丁花
 木の実落ち座敷すみずみまで深夜
 縄文の末裔として海鼠噛む
 船橋市前原西 鈴木 登子(会員)
 (推薦者 渡辺 澄)
 あいまいな距離にいるなり萍紅葉
 カーテンを引き繭玉の中におり
 にんげんの非武装地帯鳥渡る
 千葉市花見川区 里見 さち(会員)
 (推薦者 千葉 信子)
 雨弾くステンドグラス久女の忌
 藤浪やジャングルジムにふらここに
 三伏や彼は火が好きピザが好き
 松戸市松戸 佐藤 浩子(会員)
 (推薦者 宮坂 静生)
 一つづつ果たす仕事や梅の頃
 かなかなや森に出遇ひてみな知己に
 ちちろ聞くりーチの皿のつるべ井戸
 野田市岩名 金田めぐみ(会員)
 (推薦者 実籾 繁)
 手加減に技のありけりかるた取り
 ほどほどという基準あり年新た
 雪しんしん美しきものは爪隠す

春の吟行会

『青べか物語』の地・郷土博物館めぐり

会場 浦安市文化会館

平成二十五年四月二十九日

受付は十時からであったが、二十分前には参加者が続々と詰めかけ始めていた。天候にも恵まれて予定通り七十二名の参加者が集った。受付後、多くの参加者はいったん会場の浦安市文化会館をあとにし、吟行に出た。郷土博物館は昭和のなかごろの雰囲気。ペーゴマや輪投げの施設があり、小さな掘り割り様の池にはべか舟も浮かんでいる。境川の河岸はレンガが覆い、昔日の青べかを想像するには困難だが、どこか哀愁を帯びて見えた。



博物館のべか舟

十二時投句締切。会場は、皆さん同じ弁当にお茶の昼食で賑やかな懇親会場に変わった。句会は予定よりも少し早めて始まった。高木事務局長の司会で選句、披講と順調に進行した。会長、副会長、顧問の講評には教えられるところが多く、選ばれた栄光の句の所以が深く納得できた。その後の一般参加者の講評も良かった。成功裏に終わった会場を後にし外に出ると、薫風がひとあし早く参加者の顔を撫でた。いい日であった。

(高橋宗史記)

〔入賞者作品〕 (二句のうち一句)

- 豆腐屋もたばこ屋も留守夏はじめ 柳 恵子
- 海が縮んでべか舟に春の客 小林 実
- 夏の川筋い結びという昭和 相山 賢三
- 晩春の記憶にすこし塩の味 黒澤 雅代
- べか舟のゆれを試して夏に入る 矢野 忠男
- 路地に阪妻二十世紀は逃げ水 秋尾 敏
- 花過ぎのごくかんたんな舟の旅 久野 康子
- 周五郎の徳利三本四月逝く 石井紀美子
- ゆく春の句座に山本周五郎 吉野 精
- ぶつくれ舟薔薇と水門まだ眠る 諸藤留美子
- はつなつは少年の目の高さより 清野 敦史

- 周五郎座す天鉄の春灯 加藤 法子
- 蛤の独りごと聞く周五郎 長井 寛
- 蒼蠅に付きまとはれて蒸気河岸 檜垣 梧樓
- 蛤の墓標が痒い街にいる 吉田 耕史
- べか舟の舳先につなく閑日かな 鈴木 瑩子
- 浦安の消えざる指紋昭和の日 重田 忠雄
- 青べかのひっそりかんと昭和の日 横須賀洋子
- 惜春へべか舟すこし揺らされる 青木 一夫
- つつじ燃ゆむかし漁師の軒集め 保坂 末子

〔一般作品〕

- 「やん目売ります」の張り紙もう薄暑 並木 邑人
- 内井戸や鮮度自慢の鱻売る 小高 稔
- 船宿の投網のあまた薄暑かな 鈴木 陽子
- 薫風や榎の鋸屑匂ひけり 山崎 幸子
- 潮の香は地名のみにて昭和の日 高木 一恵
- 三十円の朝日寂れてみどりの日 野口 京子
- 白南風やこれで浅蜷を取ったのか 相原 一枝
- 花は葉に言葉が空気になつている 山崎 文子
- 浦安は若葉青べか今いずこ 高橋 宗史
- 小舟あるらし若葉の町推敲す 小林 俊子
- 昭和の日煙草屋は小津映画めく 木之下みゆき
- 春の雲青うらやすをうろつきぬ 大畑 等
- 惜春の路地 阪妻のポスター 山口 明
- 置き去りの青べか昭和の日のにおい 富澤さち子
- 夏川の濺み埋もれてオートバイ 富澤ムツ子
- 春蘭けて全景セピアの漁師町 下村 洋子
- 東京湾にあの日の機影昭和の日 田村 隆雄
- 桜実にだれも住まない漁師町 森村 文子

三軒長屋まん中にみなみかぜ
 べか舟に修羅の影無し花は葉に
 べか舟におっとり来て春惜む
 透かし絵のような町並亀鳴けり
 三大スターのボスター褪せし暮春かな
 のどけしやたつぷんたつぷんべかゆする
 春はまほろしべか舟の華奢である
 はつ夏の空へ小舟は翼持つ
 行きつけし船宿はなく春惜しむ
 駄菓子屋の茅葺の軒梅は実
 浦安の電話〇〇七一海苔簀かな
 青べかや高き護岸に遅桜
 浦安の薫風柳行李につめくれよ
 夫帰らず海苔簀に春を掻きあつめ
 春の家三軒長屋昭和の日
 夏初め昔河童の子供です
 若葉風入れる長屋の格子窓
 ぼてふりの水のこぼれる初夏の路地
 手洗鉢当ても清潔日本人
 べか舟に「すつてんばれ」の薄曇かな
 風薫るバス停猫実三丁目
 ゴールデンバットの湿り春惜しむ
 風光る駄菓子屋の土間うす暗き
 てふてふと昨日へ架かる橋渡る
 ヨシキリの行方葦原消えしまま
 働きて朽ちし川舟鷺の宿
 昭和の日ワナゲ侮り難きかな
 丁寧な楷書五月の取り決め書

渡辺 澄
 井上けい子
 高野 礼子
 伊藤 典子
 内田 庵茂
 細野 一敏
 山中 葛子
 松澤 龍一
 宮 利男
 野口 尚子
 澤村いづみ
 阿部 良治
 佐藤 晏行
 赤羽根めぐみ
 内田 正成
 星野 一恵
 山中とみ子
 関根 信三
 大内 靖夫
 三浦 土火
 イザベル真央
 岡田 淑子
 希田沙知子
 楠見 恵子
 竹内 絵視
 高橋 博
 なかもと淑子
 林 阿愚林



1位の柳さん



2位の小林さん

春泥の境川河童おっぱらみ
 海が消えべか舟消えて青葉騒
 青べかをさがして歩く昭和の日
 春の虹放射線にも色つけよ
 船霊祀る晩春の陽の溶けそうや
 べか舟遊びくらぐら揺らす河童かな
 (総出句数一四四句、一人五句選、二句合点で順位)
 (作品の上の・印は正副会長、幹事長、顧問特選)

白木 暢子
 岩崎 令子
 小川トシ子
 岡田 春人
 武田 伸一
 金子 未完

■第二回ミニ吟行会のお知らせ

とき 平成二十五年七月二十一日(日)十三時から

会場 印西市立中央公民館
 (電話番号〇四七六〇四二一九二)
 印西市大森三九三四一

集合 印JR成田線木下駅 午前十時四十分

会費 五〇〇円

申込〆切 六月三十日 定員は二十四名(乗船定員により)

連絡先 島田翠松(TEL・FAX〇四七六〇四二一九三三二六)
 高橋宗史(TEL・FAX〇四一七二二五一三三三八二)

備考 遊覧船による川めぐり、昼食の後句
 会場へ行きます。



会場で一緒に昼食

津田沼研究句会報告

(於：津田沼一丁目町会会館)

第二四八回 (平成二十五年一月八日)

司会 白木 暢子

初夢にやあ暫くと五・六人
雪女火照る火照ると出てゆけり
莫大の股引かつて新左翼
おめでとうミツキーマウスが母を抱く
枯木立上野の山に鯨居て
福引に夢追ひかけて素寒貧
幕末の眠りをかこつ海鼠かな
人日の齒間ブラシのゆるいかな
枯はちす固定観念捨てなさい
年の瀬の仏化粧に忙がしい
暖冬でおろちが遊ぶ歌舞伎町
ルビ付きの本の眠さや群千鳥
ドナルドキーン新春放談の啄木論
嫁が君構えて影を踏むまいぞ
真冬日のソラマチ刻々と夕
鼻筋に白粉の子の年迎ふ

横須賀洋子
楠見 恵子
佐藤 晏行
岡田 淑子
なかもと淑子
大塚 弘毅
大畑 等
檜垣 梧樓
希田沙知子
吉野 精
金子 未完
山中 葛子
山中 錦子
大村 阿愚林
林 阿愚林
白木 暢子
股野 久子

後藤 章
大畑 等
股野 久子
林 阿愚林
吉野 精
なかもと淑子
大村 錦子
佐藤 晏行
檜垣 梧樓
希田沙知子
岡田 淑子
金子 未完

雪積もる白髭橋の形かな
春ゆうべ他人の家より我が家見る
荒事もにらみも遠く鬼やらひ
大寒や煎餅の音聞き分ける
春立つ日鬼一匹は居て欲しい
一人でもつぶやうに鬼は外
鬼は外時計を探す夫がいる
白の寒餅飯親のよう取りあげる
尾を立てて百匹ばかり猫やなぎ
切山椒人形町から水天宮
空海の明るさを背に地虫出づ
うふふ五つも若いだなんて春近し

第二五〇回 (平成二十五年三月十二日)

司会 横須賀洋子

春立ちぬ塔婆カタカタ鳴りはじむ
立春の空飛ぶ大志するめいか
縄張りや羽ばたき止まぬ冬の鳥
あおあおと暖気をつつ木の芽和
一人でも咲こうと決めて白い梅
水ごころゆらして鯛の頭挿す

横須賀洋子
村上 澄子
大塚 弘毅
楠見 恵子
白木 暢子
山中 葛子

亀鳴けり歳時記を出たはっかりに
うららかや死後の携帯電話鳴る
霾やにんげんの影おしよせる
弁当の春めくものを選びけり
黙禱の沸点きわむ揚雲雀
梅一輪少し遅れて泣く漢
隠れキリシタン末裔は沈丁花
三寒四温いつの日殺されるか
劣情の芹の一筋口にあるか
くまばち欲しいのは美白クリーム
啓猫の鳴くはいやです丑三つ
恋猫の鳴くはいやです丑三つ
納むべき雛抱き母に抱かれおり
啓蟄は天穴をあけサービスす
改善の津波情報花だより
一望の菜の花まぶし射程距離
勿忘草日本の明日に空はある
パンジーのフリル濡れ色無人店

横須賀洋子
楠見 恵子
山中 葛子
後藤 章
希田沙知子
林 阿愚林
小林 実
吉野 精
大畑 等
金子 未完
大塚 弘毅
なかもと淑子
佐藤 晏行
檜垣 梧樓
大村 錦子
岡田 淑子
白木 暢子
股野 久子

青葉研究句会報告
(於：千葉市民会館・第五会議室)

第十九回 (平成二十五年一月二十四日)
司会 長浜 聰子

鳴高音はぐれた指が痛みだす
動かぬは死なり初虹追いかける
口下手の箸上手なる節料理

芝崎 梓
並木 邑人
細野 一敏

第二十回 (平成二十五年二月二十八日)

司会 山崎 幸子

鎮痛剤効かぬ建国記念の日
落椿退き際という射程距離
鮫鯨のたましいまでも吊し切り
朝市のつかみ量りの露の臺
恋猫の暗がりに置くピカソの目
立春や金米糖の角の数
韃靼の鞭打つ音が春一番
薬湯の煮える頃です初雪です
舌打ちのちえつと聞えし猫の恋
跳べばとべさう三月の潦
雪像を崩すシャベルや風ゆるむ
春一日土の匂いと日の匂い
轉にどきつととしたり蓄なり
春の月宙の渚からオーパチュア
風曲がる街角なりき草青む
目つむればいつでも会える春北斗

矢野 忠男
石井紀美子
保坂ミエ子
細根 葉
鈴木 陽子
馬淵 津枝
大塚 弘毅
長浜 聰子
山崎 幸子
長谷川千枝子

一粒の内緒内緒の種を蒔く
かぎろいて誰も戻らぬ村となる

細根 葉
加藤 法子

第二十一回 (平成二十五年三月二十八日)

司会 矢野 忠男

一粒の内緒内緒の種を蒔く
かぎろいて誰も戻らぬ村となる

細根 葉
加藤 法子

春爛漫忘れられてる非常口
 忘れんぼ他はそれなりつくしんぼ
 かぎろいて遠くより来る兵馬備
 亀鳴くや津波が街を攫った日
 ちぎつてもちぎつても春の雲
 お中日時の流れの端濡れて
 この道は美人に注意四月馬鹿
 亀鳴いて古墳の主の物語
 開け閉ては今も村人彼岸寺
 春光の船出山河を引き締める
 母よりも少し幸せチューリップ
 接吻のあと露の蔓摘みにけり
 頑固者取って代りし妻の春
 たちの芽のこれより先は本街道

石井紀美子
 山崎 幸子
 保坂ミエ子
 椿 良松
 大塚 弘毅
 芝崎 梓
 馬淵 津枝
 小高 稔
 長谷川千枝子
 長浜 聰子
 鈴木 陽子
 並木 邑人
 細野 一敏
 矢野 忠男

柏研究句会報告

第九回 (平成二十五年二月九日)
 (於：柏市「ハックルベリー」2階)

綾取りの鉄橋渡る春の声
 ひとかたまり掴んだ雪が脈を打つ
 鴨の池ちよつと使いに飛び立ちぬ
 中空へ高跳びの子は身を反らす
 星病むで梅はひたすら白くなる
 渾身の言霊であれ青水柱
 冬満月ひとりで祝ふ誕生日
 老人のベンチに座り春来るか
 木菟の昼や賢治の小さき書
 異次元という逆上がり春兆す

栃木 きよ
 木之下みゆき
 野口 京子
 松澤 龍一
 伊藤 希眸
 下村 洋子
 岡田 春人
 イザヘル真央
 大畑 等
 長井 寛

第十回 (平成二十五年三月九日)

囀りやランチタイムの火宅僧
 粉嵐フビライ汗の馬の声
 笑う山に行く円空に逢えるから

栃木 きよ
 松澤 龍一
 木之下みゆき

緑青に触れ初蝶の狂いけり
 蠟梅はもう終ったと言う昼の飯
 割る前に卵の割れて小さな春
 あいづちの拵がつてゆく蝌蚪の紐
 昔にも昔ありけり山笑ふ

下村 洋子
 大畑 等
 野口 京子
 長井 寛
 岡田 春人

第十一回 (平成二十五年四月十三日)

白いシユシユの束ね岩波資本論
 空家ありいと大きな桜あり
 晩春のひと色画家の迷ひをり
 花吹雪世にも遠のく忠魂碑
 水の春ゴツホの耳が聞いている
 新緑は大海を産む少年よ
 地の塩となれぬおんなに蠶れり
 この星の真ん中に坐し山笑う

松澤 龍一
 大畑 等
 岡田 春人
 小張 直子
 栃木 きよ
 伊藤 希眸
 下村 洋子
 長井 寛

図書紹介

句集『墮天使の羽』 羽村美和子

平成二十五年三月十日 文學の森刊
 裏庭はジュラ紀の匂い春の雨
 さくらさくらそこにいるのはわたし
 若葉風背中のあたりがちよつと反骨

合同句集『歳月』 イザヘル真央

平成二十二年十二月一日 ふらんす堂刊
 手術後の夫と櫻の中にをり
 青林橋愛するものに名前あり
 草紅葉海のサイレン幽かなり

句集『悲母なりし』 高木 一恵
 平成二十二年二月十九日 ふらんす堂刊
 靴ぬげば手児奈の素足かつしか野
 楷若葉をさなき彼と彼女たち
 ピノキオは未だ木の鼻小鳥来る

ひろば

市原市春季俳句大会

四月二十七日、市制五十周年記念市原市春季俳句大会が、片山由美子氏を主選者に迎え開催された。兼題の部は県内の一一七人から四九八句の応募があり、また当日の席題句会は六九人の出席をもって実施された。辛口で知られる片山氏の講評が印象的であり、また好評でもあった。(並木邑人記)

☆兼題の部／菜の花・市・雑詠の三句一組

市原市長賞

光り合ふ太平洋と菜の花と 張替 和子

市原市俳句協会賞

擦れ違う野火の匂いの男衆 石井紀美子

市議会議長賞

泰然として種牛の陽炎へり 稲澤 雷峯

教育長賞

十人で繕ふ魚網花菜風 伊東 泰子

☆席題の部／蝶・春の灯

市原市長賞

初蝶や知恵のはじめの人見知り 伊藤 和枝

市原市俳句協会賞

本籍は限界集落蝶生るる 重田 忠雄

市議会議長賞

蝶々の風踏むやうに飛びたてり 山崎 節子

教育長賞

春灯やあと三ページのサスペンス 佐川 榮子

《會員・会友の近況》

- ・立春も過ぎ春をひたすら待つて居りますので、今日の雪降り一日も早く春を待つと思いで一杯でございます。(伊東 靖子)
- ・富里市において富里俳句会の世話役をしながら二百五十回を越えました。言葉さがしをまだまだ続けたいです。(秋葉 紅陽)
- ・三・一を思い、今年も被災地を訪ねたいと思つて居ります。(石崎多寿子)
- ・一昨年主人が他界し、俳句の方に力が入りません。(飯田 静子)
- ・柏研究句会の方々が自己主張の強い句を作られるので大いに勉強になります。(イザベル真史)
- ・この一月は原稿提出が重なり四苦八苦。いくら捻つても駄句はそれなりの成果だ。母と孫の句に偏っている自分ですが、今だからこそ詠めるのだと幸せに思いそれを大切にしている。鋭く、美しく、併せて花鳥風月の魅力的な俳句に近づき、バランスの良い作品が出来ればと思う昨今です。(金澤 恵子)
- ・米作農業を生業としてきたのですが、六十歳代後半に失明の可能性を知らされ、あわてて按摩、マッサージ、指圧師の資格を七十歳で取得、ようやく十年目に入りました。脳梗塞による半身不随やリュウマチに悩む患者さんへ訪問治療を中心に日々過ごしています。俳句も楽しんでます。香取哲郎さんと一緒に「十六島俳句会」を立ち上げ四年が経過しました。現在その世話人を仰せつかっています。(香取 白文)
- ・MR外科再通院致し、自分の骨との会話を愉しみ、自分なりの俳句を愉しませていただき、感謝致しております。(加納ひでこ)
- ・一月に満百歳で父が逝き、俳句に遠くおりました心もちよつと俳句の方に向き楽しんでいただけらと思つております。(興津 恭子)

掲示板

《會員・会友異動》

- 逝去 (會員) 中嶋いづる
- 入会 (會員) 林 計男
- 退会 (會員) 荒井恒友、柿沼梓、河地チエ子、志賀綾乃、白井幸子、田村隆雄 (会友) 織田孝正、池田久子、辛崎千珠、中堀啓子

- 転出 渡部 健 (福島県へ)
- 移転 政成一行 (長生郡睦沢町へ) 野口京子 (野田市船形へ) 股野久子 (柏市光ヶ丘団地へ)

《平成二十五年年度臨時幹事会》

日時 平成二十五年四月二日(火)
 場所 船橋市勤労市民センター
 出席者 高木、高橋(宗)、野口、松澤、吉野、長浜、上野、大塚、木之下、久野、小林俊、小林美、小張、下村、高橋(健)、林、星野、細野、森村、三須、矢野、山崎 (敬称略 順不同)

議題

- 一、当協会の今後の活動(一般事項)について
 - 一・一 新幹事の紹介
 - 一・二 幹事会および幹事の役割について
 - 一・三 事業部他、運営体制について(引継ぎの結果報告共)
- 二、平成二十五年定期総会・俳句大会の結果について(概略。収支等は五月幹事会にて報告)
- 三、平成二十五年年度春の吟行会について
- 四、平成二十五年年度秋の吟行会計画について(日時は十月二十日、候補地等 ※)
- 五、第二十回 関東申信越静ブロック連絡会議に

- 六、三十五周年記念事業について
- 七、現代俳句協会(本部)の動向について 地区協理事、他
- 八、会報の発行について
- 九、その他

□□事務局・編集部だより□□

- 平成二十五年定期総会と俳句大会及び春の吟行会は、多数の方のご参加を得て、無事に終了することができました。皆さまのご協力に感謝をいたします。
- 今期より事務局は高木一恵と高橋宗史が担当することになりました。よろしくお願ひします。
- 今号は十六頁編成と近來にない充実した紙面となりました。今後とも皆さまのご意見を取り入れて、紙面のより一層の充実を計つていくつもりです。

現代俳句千葉 第一〇九号
 平成二十五年五月三十一日発行

発行人 千葉県現代俳句協会
 会長 大畑 等

現代俳句千葉編集部
 〒278-0037 野田市野田六六五番地 松澤 龍一

千葉県現代俳句協会事務局
 〒270-1471 船橋市小室町二八〇四 高木 一恵

電話〇四七-四四七-二九一二
 FAX〇四七-四四七-二九七二